

科目名	小児科学										
科目名(英)											
単位数	1		時間数		30時間		担当者		大久保 史子		
実施年度	2023年度		実施時期		後期		担当者実務経験		病院に医師として勤務		
対象学科・学年	言語聴覚学科 2年										
授業概要	胎児・新生児・乳幼児・小児期から思春期にかけての疾患・病態、検査、治療についての基本的概念を習得する										
授業形態	講義： ○		演習： △		実習：		実技：		※ 主たる形態：○ その他：△		
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標					
	○	○				小児の体、発達について理解し、説明できる					
	○	○				小児リハビリテーションに関わる医学的知識を述べることができる					
	○	○				小児の疾患とその後のリハビリテーションの流れについて説明できる					
テキスト・教材 参考図書	医学書院 言語聴覚士のための基礎知識 小児科学・発達障害学										
授業計画	回数	授業項目・内容					授業外学修指示				
	1	小児科学概論 ～小児科学とは～					テキストの該当箇所を読んで、予習復習をする(60分)				
	2	成長と発達① 発育期の分類					テキストの該当箇所を読んで、予習復習をする(60分)				
	3	成長と発達② 成長・発達とその評価					テキストの該当箇所を読んで、予習復習をする(60分)				
	4	出生前の因子による疾患① 遺伝子病					テキストの該当箇所を読んで、予習復習をする(60分)				
	5	出生前の因子による疾患② 染色体異常症					テキストの該当箇所を読んで、予習復習をする(60分)				
	6	出生前の因子による疾患③ 胎芽病と胎児病					テキストの該当箇所を読んで、予習復習をする(60分)				
	7	小児神経疾患・精神疾患① 神経系の奇形					テキストの該当箇所を読んで、予習復習をする(60分)				
	8	小児神経疾患・精神疾患② 痙攣性疾患					テキストの該当箇所を読んで、予習復習をする(60分)				
	9	小児神経疾患・精神疾患③ 神経系感染症、脳腫瘍					テキストの該当箇所を読んで、予習復習をする(60分)				
	10	小児神経疾患・精神疾患④ 神経皮膚症候群、変性疾患					テキストの該当箇所を読んで、予習復習をする(60分)				
	11	小児の神経筋疾患① 運動ニューロン病、ニューロパチー					テキストの該当箇所を読んで、予習復習をする(60分)				
	12	小児の神経筋疾患② 重症筋無力症					テキストの該当箇所を読んで、予習復習をする(60分)				
	13	小児の神経筋疾患③ ミオパチー					テキストの該当箇所を読んで、予習復習をする(60分)				
	14	まとめ① 授業内容のワークシート作成					ワークシートを完成させる(60分)				
	15	まとめ② 国試過去問					小児科学に関する国試過去問を解き、解説内容を覚える(60分)				
評価方法											
						言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	定期試験					◎	◎				100%
	小テスト										
	宿題・レポート										
	発表・作品										
履修上の注意											

科目名	学習認知心理学の演習						
科目名(英)							
単位数	1		時間数	30時間	担当者	大森 晶子	
実施年度	2023年度		実施時期	後期	担当者実務経験	小児施設で言語聴覚士として勤務	
対象学科・学年	言語聴覚学科 2年						
授業概要	人間の認知の理解を深める。自分たちの認知過程を実習など通して理解する。						
授業形態	講義:		演習: ○	実習:	実技:	※ 主たる形態:○ その他:△	
学習目標 (到達目標)	言語 情報	知的 技能	運動 技能	態度 意欲	その他	目標	
	○	○				記憶のシステムと種類について述べるができる	
	○	○				認知システムと思考について述べるができる	
	○	○				トップダウン処理・ボトムアップ処理について説明できる	
	○	○				スキーマ構造、スクリプト構造について説明できる	
テキスト・教材 参考図書	サイエンス社「情報処理心理学」中島義明 参考文献:プリントにて配布						
授業計画	回数	授業項目・内容				授業外学修指示	
	1	記憶のシステムと種類				教科書の該当部分を読んで復習する(30分)	
	2	ワーキングメモリー				教科書の該当部分を読んで復習する(30分)	
	3	展望的記憶、プライミング				教科書の該当部分を読んで復習する(30分)	
	4	視覚のメカニズムと認知				教科書の該当部分を読んで復習する(30分)	
	5	メタ認知と認知構造				教科書の該当部分を読んで復習する(30分)	
	6	論理的推論のメカニズムと実習				教科書の該当部分を読んで復習する(30分)	
	7	確率的判断のメカニズムと実習				教科書の該当部分を読んで復習する(30分)	
	8	演繹的思考・帰納的思考				教科書の該当部分を読んで復習する(30分)	
	9	創造的思考と実習				教科書の該当部分を読んで復習する(30分)	
	10	知覚と認知によるゆがみ トップダウン・ボトムアップ処理				教科書の該当部分を読んで復習する(30分)	
	11	スキーマ構造と情報処理				教科書の該当部分を読んで復習する(30分)	
	12	基準・概念・スクリプト構造				教科書の該当部分を読んで復習する(30分)	
	13	ヒューマンエラー 失敗				教科書の該当部分を読んで復習する(30分)	
	14	復習				復習にて得られた情報を利用しこれまでの内容をまとめておく(30分)	
	15	まとめ				定期試験範囲をまとめておく(60分)	
評価方法	(1)授業の中で小テストを5回実施する。(2)レポートを数回実施する。(3)定期試験(筆記)を実施する。 以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。						
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	定期試験(筆記)	◎	○				80%
	小テスト	◎	◎				10%
	レポート	○	◎				10%
履修上の注意							

科目名	心理測定法									
科目名(英)	Psychological methods									
単位数	1		時間数	15時間		担当者	井上 仁郎			
実施年度	2023年度		実施時期	後期		担当者実務経験				
対象学科・学年	言語聴覚学科 2年									
授業概要	ものの見え方、聞こえ方、記憶、そして発達や知能、学力などの人の「心理」を測るとはということなのかを学ぶ。また、心理測定法を言語聴覚療法にどう活用していくのかを考える。									
授業形態	講義：○		演習：		実習：		実技：		※ 主たる形態：○ その他：△	
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標				
	○	○				心理測定の基本概念と方法について説明できる				
	○	○				測定尺度について説明できる				
	○	○				評定法の基本概念について説明できる				
	○	○				心理尺度の作成方法について説明できる				
	○	○				テストの基本概念について説明できる				
	○	○				質問紙法の基本概念について説明できる				
	○	○				テストの種類と特性について説明できる				
テキスト・教材 参考図書	サイエンス社「新心理学ライブラリ13 心理測定法への招待 測定から見た心理学入門」市川伸一 編著 参考文献：プリントにて配布									
授業計画	回数	授業項目・内容					授業外学修指示			
	1	心理測定法総論					授業内容に該当する指定教科書の該当部分を復習しておく。30分			
	2	測定尺度					授業内容に該当する指定教科書の該当部分を復習しておく。31分			
	3	評定法の基本概念					授業内容に該当する指定教科書の該当部分を復習しておく。32分			
	4	心理尺度の作成方法					授業内容に該当する指定教科書の該当部分を復習しておく。33分			
	5	テストの種類と特性					授業内容に該当する指定教科書の該当部分を復習しておく。34分			
	6	テストの基本概念					授業内容に該当する指定教科書の該当部分を復習しておく。35分			
	7	質問紙法					授業内容に該当する指定教科書の該当部分を復習しておく。36分			
評価方法	8	その他の心理アセスメント					授業内容に該当する指定教科書の該当部分を復習しておく。37分			
	(1)定期試験(筆記)を実施する。 以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。									
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合			
	定期試験	○	○				100%			
履修上の注意										

科目名	リハビリテーション概論						
科目名(英)							
単位数	1		時間数	30時間	担当者	永江 信吾	
実施年度	2023年度		実施時期	後期	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務	
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼間部2年生						
授業概要	リハビリテーションという言葉は、一般社会でも非常に使われるようになった。単に訓練を行い、機能回復のみを行うのではない。リハビリテーション本来の理念、基本的知識を修得する。模擬体験を通じて、生活の困難さを体験する。						
授業形態	講義： ○		演習： △	実習：	実技：	※ 主たる形態：○ その他：△	
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標	
	○	○				リハビリテーションの理念と概念について説明できる。	
	○	○				国際生活機能分類(ICF)と国際障害分類(ICIDH)の特徴と相違が説明できる。	
	○	○				医療・保健・社会福祉とリハビリテーションの関わり方について説明できる。	
	○	○				リハビリテーションの過程と方法について概説できる。	
				○		グループディスカッションや発表を通して、新たな気づきを得ることができる。	
テキスト・教材 参考図書	・診断と治療社 PT・OT・ST・ナースを目指す人のためのリハビリテーション総論 要点整理と用語解説 改定第3版						
授業計画	回数	授業項目・内容				授業外学修指示	
	1	私が考えるリハビリテーションとは リハビリテーションとはどんなイメージか				各自で新たな気づきを追記しまとめる(30分)	
	2	リハビリテーションの理念と概念、歴史について				教科書や配布資料を読み返す(30分)	
	3	急性期・回復期・生活期の特徴と役割について				教科書や配布資料を読み返す(30分)	
	4	生理的な老化と病的老化の違いとは。				教科書や配布資料を読み返す(30分)	
	5	廃用症候群って何だろう。				教科書や配布資料を読み返す(30分)	
	6	理学療法士とリハビリテーション				教科書や配布資料を読み返す(31分)	
	7	理学療法士とリハビリテーション				教科書や配布資料を読み返す(30分)	
	8	作業療法士とリハビリテーション				教科書や配布資料を読み返す(30分)	
	9	作業療法士とリハビリテーション				教科書や配布資料を読み返す(30分)	
	10	リハビリテーション専門職の1日の流れ・1か月の流れ・1年の流れ				教科書や配布資料を読み返す(30分)	
	11	国際生活機能分類と国際障害分類				教科書や配布資料を読み返す(30分)	
	12	自分のこれからの目標と行動計画を立ててみよう				教科書や配布資料を読み返す(30分)	
	13	車いすについて知る 車いすで麻生リハを探検				教科書や配布資料を読み返す(30分)	
	14	麻生リハは本当にバリアフリーか？車いす後の体験を振り返る				教科書や配布資料を読み返す(30分)	
	15	小テスト・リハビリテーションのイメージを再考する				試験対策のまとめを行う(30分)	
評価方法	(1)15コマ目に小テストを実施(2)授業後にまとめシートを作成。授業資料と一緒に15コマ目後に提出。ファイリング 以下を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。						
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	小テスト	○	○				40%
	まとめシート				○		60%
履修上の注意							

科目名	言語聴覚療法の評価・診断						
科目名(英)	Evaluation and Diagnosis of Speech-Language Therapy						
単位数	1		時間数	30時間	担当者	専任教員	
実施年度	2023年度		実施時期	後期	担当者実務経験	言語聴覚士として病院に勤務	
対象学科・学年	言語聴覚学科 2年						
授業概要	言語聴覚療法の評価診断の基本的概念・技能・態度を修得する。						
授業形式	講義：△		演習：○	実習：	実技：	※ 主たる形態：○ その他：△	
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標	
	○	○				言語聴覚療法の評価診断における基本的概念を説明できる。	
		○	○			コミュニケーション行動を観察する視点を説明できる。	
	○	○				評価診断結果をサマリにまとめる枠組みを説明できる。	
	○	○				言語聴覚障害を総合的に評価し鑑別診断する方法を説明できる。	
		○	○			言語聴覚療法を総合的に評価し鑑別診断する方法を模擬的に実施できる。	
テキスト・教材 参考図書	医歯薬出版株式会社 演習で学ぶ言語聴覚療法評価入門						
授業計画	回数	授業項目・内容				授業外学修指示	
	1	初回面接(インテーク面接)				授業内容を復習する(30分)。	
	2	観察と測定				課題動画を視聴しレポートを作成する(30分)。	
	3	観察の実践				授業内容を復習する(30分)。	
	4	スクリーニング検査				スクリーニング検査を自作してくる(60分)。	
	5	標準予防策				日頃の手洗い、手指消毒の方法について、医療人として正しい手順に改める。Forms課題に取り組む(30分)	
	6	バイタルサインの測定				クラスメイト3名以上の脈拍と血圧を測定し、用紙に記入する(30分)。	
	7	STADの手続き				STADの手続きを確認する(30分)。	
	8	STADの演習				STADの実技練習をする(30分)。	
	9	STADの結果と考察				模擬症例のSTADの結果から、次に実施した方がよい検査バッテリー名を立案し、根拠を述べる(30分)。	
	10	成人分野のサマリの書き方				模擬症例についてのサマリを作成する(30分)。	
	11	小児分野のサマリの書き方				模擬症例についてのサマリを作成する(30分)。	
	12	SOAP、デイリーノートとケースノート				先輩のデイリーノートとケースノートを、それぞれ3施設以上目を通す(30分)	
	13	リスク管理				授業内容を復習する(30分)。	
	14	客観的臨床能力試験(OSCE)				フィードバックを受けた事項について改善策を考え、評価実習に向けて行動に移す。	
	15	客観的臨床能力試験(OSCE)					
評価方法	(1)レポートを7回実施する。(2)客観的臨床能力試験(OSCE)を実施する。 以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。						
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	客観的臨床能力試験(OSCE)	○	○	○	○		60%
	宿題・レポート	○			○		40%
履修上の注意							

科目名	失語症の展開							
科目名(英)	Deployment of Aphasia							
単位数	1		時間数	45時間		担当者	高津原 直樹	
実施年度	2023年度		実施時期	後期		担当者実務経験	言語聴覚士として病院に勤務	
対象学科・学年	言語聴覚学科 2年							
授業概要	失語症に関連する検査、評価、訓練について実技演習を通して学び会得する。 前期に習った範囲を含む、失語症全般についての知識を習得する。							
授業形態	講義：△		演習：○		実習：	実技：△	※ 主たる形態：○ その他：△	
学習目標 (到達目標)	言語 情報	知的 技能	運動 技能	態度 意欲	その他	目標		
	○	○				各種失語症検査の対象、目的、手技、分析方法について説明できる。		
			○	○		標準失語症検査(SLTA)の手技について習熟する。		
	○	○				検査結果から失語症者の問題点を抽出し、訓練目標・計画を立案できる。		
	○	○				代表的な失語症掘り下げ検査について理解し、対象と検査目的を列挙できる。		
テキスト・教材 参考図書	(株)医学書院 標準言語聴覚障害学 失語症学 第3版 (株)新興医学出版社 標準失語症検査(SLTA) マニュアル							
授業計画	回数	授業項目・内容					授業外学修指示	
	1	標準失語症検査(SLTA)の構成と目的、手技、手法 I. 聴く 概説					授業内容と前期の内容を復習しておく(30分)。	
	2	SLTA I. 聴く 実技					STLA「I. 聴く」の項目の練習をする(30分)。 動画症例の記録を実施する(30分)。	
	3	SLTA I. 聴く 実技						
	4	SLTA II. 話す 概説					STLA「II. 話す」までの項目の練習をする(30分)。 動画症例の記録を実施する(30分)。	
	5	SLTA II. 話す 実技						
	6	SLTA III. 読む 概説					STLA「III. 読む」までの項目の練習をする(30分)。 動画症例の記録を実施する(30分)。	
	7	SLTA III. 読む 実技						
	8	SLTA IV. 書く、V. 計算 概説					STLA「IV. 書く」までの項目の練習をする(30分)。 動画症例の記録を実施する(30分)。	
	9	SLTA IV. 書く、V. 計算 実技						
	10	SLTAのプロフィール作成					単元試験に向けて、SLTAの採点と分析ができるよう になっておく(60分)	
	11	SLTA検査結果分析と失語症タイプ分類、問題点の抽出						
	12	単元試験					SLTAプロフィールと発話特徴の情報から、失語症タ イプ分類ができるようになるまで復習する(30分)。	
	13	WAB失語症検査					WAB失語症検査の練習をする(60分)。	
	14	WAB失語症検査						
	15	SALA失語症検査					SALA失語症検査の練習をする(30分)。	
	16	失語症掘り下げ検査(重度失語症検査、TOKEN TEST)					各掘り下げ検査の練習をする(30分)。	
	17	失語症構文検査(STA)、失語症語彙検査(TLPA)、CADL					検査関連の国試過去問を解いて理解する(30分)。	
	18	失語症治療の理論と技法					訓練関連の国試過去問を解いて理解する(60分)。	
	19	失語症の問題点の抽出、目標設定						
	20	SLTA実技試験/レポート作成					失語症当事者様への検査に向けてSLTAを練習して おく(60分)。	
	21	SLTA実技試験/レポート作成						
	22	特別講義：失語症当事者講演					後期試験に向けて検査、訓練に関する国家試験過去 問をすべて網羅し、理解しておく(60分)。	
	23	特別講義：失語症当事者講演						
評価方法	定期試験：筆記試験 単元試験：筆記試験 レポート：動画症例のSLTAレポート、失語症者の社会参加についてレポート 実技試験：SLTAを実施。具体的な試験手順等は授業内で提示。							
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合	
	定期試験	○	○				40%	
	単元試験		○				20%	
	宿題・レポート	○	○				10%	
	実技試験			○	○		30%	
履修上の注意								

科目名	高次脳機能障害の展開						
科目名(英)	Development of Higher Brain Dysfunction						
単位数	1		時間数	45時間		担当者	井上 聖子
実施年度	2023年度		実施時期	後期		担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科 2年						
授業概要	高次脳機能障害の検査や訓練立案ができる。症例レポートの作成法を学び、実習に生かすことができる。国家試験に向け知識の定着を図る。						
授業形式	講義: △		演習: ○	実習:	実技:	※ 主たる形態:○ その他:△	
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	目標	
	○	○				訓練立案について説明できる。	
	○					検査について説明・実施できる。	
	○	○				国家試験問題を解くことができる。	
テキスト・教材 参考図書	教科書:医学書院、藤田郁代、高次脳機能障害学 第2版、インテルナ出版 荒木謙太郎、言語障害 スクリーニングテスト(STAD)、文光堂 網本 和 PT・OTのための高次脳機能障害ABC、						
授業計画	回数	授業項目・内容				授業外学修指示	
	1	WAIS-Ⅲ 解釈/分析/症例				レポートの提出のため30分程度学習	
	2	半側空間無視の検査BIT				授業プリントによ30分程度の予習	
	3	半側空間無視の検査BIT 実技				授業プリントによ30分程度の予習	
	4	注意機能検査の検査CAT				授業プリントによ30分程度の予習	
	5	注意機能検査の検査CAT				授業プリントによ30分程度の予習	
	6	失行の検査(SPTA)				授業プリントによ30分程度の予習	
	7	失行の検査(SPTA) (WAB)実技				授業プリントによ30分程度の予習	
	8	遂行機能障害の検査BADS				授業プリントによ30分程度の予習	
	9	遂行機能障害の検査FAB,WCST,Stroopテスト				小テストの為、30分以上の学習	
	10	リバーミード行動記憶検査				授業プリントによ30分程度の予習	
	11	中テスト、実技練習				授業プリントによ30分程度の予習	
	12	失認の検査(VPTA)				小テスト30分予習	
	13	Vineland-Ⅱ 実施方法				小テスト30分予習	
	14	実技練習				レポート作成(動画をみて採点する課題10分)	
	15	高次脳機能障害の訓練概要				授業プリントによ30分程度の予習	
	16	注意障害の訓練、記憶障害の訓練				国試問題の小テスト10分	
	17	半側空間無視の訓練				授業プリントによ30分程度の予習	
	18	失行・失認の訓練、遂行機能障害の訓練、認知症の訓練				授業プリントによ30分程度の予習	
	19	認知症の訓練、国家試験問題解説				授業プリントによ30分程度の予習	
	20	全体像に基づいた治療(訓練・指導・支援)の優先順位、プロセス、家族・他職種・地域社会等との連携と医療福祉制度・サービス				ケースノートを見て比較するレポート	
	21	治療効果の測定法、サマリ作成、治療のカンファレンス報告、結果のフィードバック(症例)、等				授業プリントによ30分程度の予習	
	22	定期試験についての説明、先輩からの実習のお話				授業プリントによ30分程度の予習	
	23	実技練習STAD				授業プリントによ30分程度の予習	
評価方法	成績処理方法: 1.テストを2回以上実施 2.定期試験 3. レポート 以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。						
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	定期試験	○	○				50%
	小テスト	○	○				40%
	宿題・レポート	○	○				10%
履修上の注意							

科目名	脳性麻痺・後天性障害の展開									
科目名(英)										
単位数	1		時間数		15時間		担当者		永澤 幹太	
実施年度	2023年度		実施時期		後期		担当者実務経験		施設、病院にて作業療法士として勤務	
対象学科・学年	言語聴覚学科 2年									
授業概要	脳性麻痺・後天性言語発達障害に対する言語聴覚療法の評価診断および指導・支援に対する知識・技能・態度を修得する。									
授業形態	講義：△		演習：○		実習：		実技：		※ 主たる形態：○ その他：△	
学習目標 (到達目標)	言語 情報	知的 技能	運動 技能	態度 意欲	その他	目標				
	○					脳性麻痺・後天性言語発達障害の指導・支援における言語聴覚士の役割を説明できる。				
	○					脳性麻痺・後天性言語発達障害の評価診断の原則・手続きを説明できる。				
	○	○				収集する情報の種類と収集方法を説明し、評価および指導・支援を模擬的に実施できる。				
テキスト・教材 参考図書	建帛社 言語聴覚療法シリーズ12 言語発達障害 3 改訂									
授業計画	回数	授業項目・内容					授業外学修指示			
	1	脳性麻痺の定義と発達を阻害する要因					授業に該当する教科書の部分について復習すること(30分)			
	2	脳性麻痺の言語・コミュニケーション評価診断					授業に該当する教科書の部分について復習すること(30分)			
	3	脳性麻痺の評価診断演習(バイタル・摂食嚥下・感覚面)					授業に該当する教科書の部分について復習すること(30分)			
	4	脳性麻痺の評価診断演習(行動評価・発達評価・まとめ)					授業に該当する教科書の部分について復習すること(30分)			
	5	後天性言語発達障害の定義と発達を阻害する要因					授業に該当する教科書の部分について復習すること(30分)			
	6	後天性言語発達障害の評価診断演習					授業に該当する教科書の部分について復習すること(30分)			
	7	脳性麻痺児・後天性言語発達障害児に対する指導・支援演習					授業に該当する教科書の部分について復習すること(30分)			
	8	まとめ					試験対策のまとめを行う(30分)			
	9									
	10									
	11									
	12									
	13									
	14									
	15									
評価方法	成績処理方法： 1.定期試験2.宿題、レポート 以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。									
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合			
	定期試験	○	◎				80%			
	小テスト									
	宿題・レポート	◎	○				20%			
履修上の注意										

科目名	LD・SLI・環境要因の展開						
科目名(英)							
単位数	1		時間数	45時間	担当者	永野 淳子	
実施年度	2023年度		実施時期	後期	担当者実務経験	小児施設にて心理担当職員として勤務	
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼間部 2年						
授業概要	LD・SLI・環境要因に対する言語聴覚療法の評価診断および言語治療(指導・支援)に関する知識・技能・態度を修得する。						
授業形態	講義: △		演習: ○	実習:	実技:	※ 主たる形態:○ その他:△	
学習目標 (到達目標)	言語 情報	知的 技能	運動 技能	態度 意欲	その他	目標	
	○	○				LD・SLI・環境要因への言語治療(指導・支援)における言語聴覚士の役割を説明できる	
	○		○	○		LD・SLI・環境要因に対し、言語聴覚療法の評価診断の基本概念と方法を説明し、模擬的に実施できる	
テキスト・教材 参考図書	イラスト図解 発達障害の子どもの心と行動がわかる本						
授業計画	回数	授業項目・内容				授業外学修指示	
	1	LDの評価診断、言語治療				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	2	環境要因による言語発達障害の評価診断言語治療				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	3	評価診断の原則、手続き				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	4	情報収集の種類と収集方法と環境面の情報収集				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	5	認知・行動面の情報収集				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	6	LDの評価診断支援① ディコーディングの評価				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	7	LDの評価診断支援② 視覚情報処理能力の評価				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	8	LDの評価診断支援③ 読解力の評価				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	9	LDの評価診断支援④ 音韻意識の評価				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	10	LDの評価診断支援⑤ 書字能力の評価				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	11	LDの評価診断支援⑥ LDの診断・支援内容のまとめ				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	12	SLIの評価診断支援① 知的障害との鑑別方法(知能検査)				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	13	SLIの評価診断支援② 認知発達の評価(知能検査)				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	14	SLIの評価診断支援③ 認知発達の評価(知能検査)				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	15	SLIの評価診断支援④ 認知発達の評価(知能検査)				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	16	SLIの評価診断支援⑤ 認知発達の評価(発達検査)				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	17	環境要因による言語発達障害の評価診断支援① 愛着障害				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	18	環境要因による言語発達障害の評価診断支援② 児童虐待				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	19	ケーススタディ① 情報収集				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	20	ケーススタディ② 評価診断				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	21	ケーススタディ③ 支援計画立案、発表				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	22	まとめ① 国試過去問の解説を作る				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
	23	まとめ② 定期試験対策用まとめシートの作成				該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)	
評価方法	(1)宿題・レポートを実施する。(2)定期試験(筆記)を実施する。 以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、S(90点以上)・A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。						
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	定期試験	○	○				80%
	宿題・レポート	○	○				20%
履修上の注意							

科目名	音声障害の理解と展開											
科目名(英)												
単位数	1		時間数		30時間		担当者		山口 優実			
実施年度	2023年度		実施時期		後期		担当者実務経験		病院にて言語聴覚士として勤務			
対象学科・学年	言語聴覚学科 2年											
授業概要	音声治療に携わる言語聴覚士に必要な条件(臨床に対する考え方、耳鼻咽喉科その他 の医師との連携、言語聴覚士としての能力)を理解する。 音声治療の実際について学ぶ。											
授業形態	講義:		演習: ○		実習:		実技:		※ 主たる形態:○ その他:△			
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標						
	○	○				喉頭の解剖においてそれぞれの部位の名称と働きを説明できる。						
	○	○				呼吸の生理と発声のメカニズムについて説明することができる。						
	○	○				音声障害疾患について発生原因および症状について説明することができる。						
	○	○				音声の評価を遂行することができる。						
	○	○				音声評価診断を行いその症状にあった治療を選び実施することができる						
テキスト・教材 参考図書	建帛社 言語聴覚療法シリーズ「改定 音声障害」医歯薬出版(株) 新編 声の検査法											
授業計画	回数	授業項目・内容					授業外学修指示					
	1	音声障害概論					配布プリントを使用して復習しておく					
	2	喉頭の解剖、呼吸生理					配布プリントおよび解剖学など過去履修科目の共通知識について資料を使用して復習しておく					
	3	喉頭の解剖、呼吸生理					配布プリントおよび解剖学など過去履修科目の共通知識について資料を使用して復習しておく					
	4	発声の仕組(正常発声)					配布プリントおよび解剖学など過去履修科目の共通知識について資料を使用して復習しておく					
	5	発声の仕組(正常発声)					配布プリントおよび解剖学など過去履修科目の共通知識について資料を使用して復習しておく					
	6	音声障害疾患の分類					配布プリントおよび教科書について復習しておく					
	7	音声の評価					配布プリントおよび教科書について復習しておく。また、自主演習を実施しておく					
	8	音声の評価					配布プリントおよび教科書について復習しておく。また、自主演習を実施しておく					
	9	音声の評価と症例検討					配布プリントおよび教科書について復習しておく。また、自主演習を実施しておく					
	10	音声治療					配布プリントおよび教科書について復習しておく。また、自主演習を実施しておく					
	11	音声治療					配布プリントおよび教科書について復習しておく。また、自主演習を実施しておく					
	12	音声治療と症例検討					配布プリントおよび教科書について復習しておく。また、自主演習を実施しておく					
	13	音声治療 無喉頭音声					症例レポートの内容について調べ深めておく					
	14	無喉頭音声 と症例検討					症例レポートの内容について調べ深めておく					
	15	まとめ					本日のまとめについて国家試験問題を念頭において復習する					
評価方法	(1)定期試験(筆記)を実施する。(2)小テストを実施する。 以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。											
		言語情報		知的技能		運動技能		態度・意欲		その他		評価割合
	定期試験	○		○								80%
	小テスト	○										20%
履修上の注意												

科目名	器質性構音障害の理解と展開						
科目名(英)							
単位数	1		時間数	30時間	担当者	城丸 みさと	
実施年度	2023年度		実施時期	後期	担当者実務経験	病院に言語聴覚士として勤務	
対象学科・学年	言語聴覚学科 2年						
授業概要	小児の言語障害で大きな比重を占める構音障害のうち、器質性構音障害(主に口蓋裂)について学ぶ。器質性構音障害の基礎知識、具体的な検査、指導訓練の基礎を身に付けることを目標とする。						
授業形態	講義:		演習: ○	実習:	実技:	※ 主たる形態:○ その他:△	
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標	
	○	○				構音障害の種類について概要を説明し、構音検査が実施できる	
	○	○				器質性構音障害における構音障害の特徴について説明できる	
	○	○				口蓋裂の病態について説明することができる	
	○	○				口蓋裂による構音障害の発現機序について説明することができる	
		○				器質性構音障害の検査後、指導、訓練について基本的な立案と実践ができる	
テキスト・教材 参考図書	教科書 :医学書院 「口蓋裂の言語治療」 岡崎恵子編著 医歯薬出版 「言語聴覚士テキスト」						
授業計画	回数	授業項目・内容				授業外学修指示	
	1	基礎知識:小児の構音障害概説と音声表記復習				構音表記を復習して講義に臨む	
	2	基礎知識:未熟構音と異常構音—その1				構音表記を復習して講義に臨む	
	3	基礎知識:異常構音の種類と特徴—その 2				構音表記を復習して講義に臨む	
	4	口蓋裂の発生と解剖				構音表記を復習して講義に臨む	
	5	口蓋裂の基礎知識:手術と術後の対応				構音表記を復習して講義に臨む	
	6	検査:発声発語器官に関する検査:口腔内視診(演習)				構音表記を復習して講義に臨む	
	7	鼻咽腔閉鎖機能に関する検査				構音表記を復習して講義に臨む	
	8	指導・訓練:音の獲得の段階				構音表記を復習して講義に臨む	
	9	指導・訓練:会話への般化まで				構音表記を復習して講義に臨む	
	10	構音訓練・検査のまとめ(演習)				構音表記を復習して講義に臨む	
	11	鼻咽腔閉鎖機能不全に対応する2次的対応				構音表記を復習して講義に臨む	
	12	口蓋裂治療パノラマ(復習)とその他の器質的構音障害				構音表記を復習して講義に臨む	
	13	その他の器質的構音障害(口腔・中咽頭癌など)				構音表記を復習して講義に臨む	
	14	国家試験の傾向と対策				本日の内容を受けて解説の理解を深めるために調べ学習をする	
	15	まとめ				まとめの内容を復習し、定期試験対策としてまとめる	
評価方法	(1)授業の中で小テストを5回実施する。(2)レポートを数回実施する。(3)定期試験(筆記)を実施する。 以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。						
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	定期試験	○	◎				80%
	小テスト	○	◎				10%
	宿題・レポート	○	◎				10%
履修上の注意							

科目名		運動障害性構音障害の展開					
科目名(英)							
単位数	2単位	時間数	45時間	担当者	潮崎 桃子		
実施年度	2023年度	実施時期	後期	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務		
対象学科・学年		言語聴覚学科 2年					
授業概要		①運動障害性構音障害についての基礎的な知識を理解し、その知識を診断・治療に活かすことができる ②医療人に求められる心構えや行動を理解し、ふさわしい行動ができる ③検査や訓練の実技演習を通して、症例を念頭に置いた技術を身につける					
授業形態		講義：△	演習：○	実習：	実技：△	※ 主たる形態：○ その他：△	
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標	
	○	○				運動障害性構音障害のタイプごとの発生機序を知り問題点を抽出できる	
	○	○	○	○		運動障害性構音障害検査についてマニュアルを使用せず実行することができる	
	○	○				検査結果をもとに発生機序を知り、構音障害以外の症状にも注目し分析できる	
	○	○				それぞれ症状について発生機序にあわせた訓練立案ができる	
	○	○	○			基本的な訓練手技について目的を説明することができ、遂行できる	
テキスト・教材 参考図書		ディサースリア検査 西尾正輝 著/インテルナ出版 ディサースリア臨床標準テキスト 西尾正輝 著/医歯薬出版株式会社 運動障害性構音障害学 廣瀬肇 著/医歯薬出版株式会社					
授業計画	回数	授業項目・内容				授業外学修指示	
	1	講義概要、演習の進め方について、ディサースリアの検査法				前期の学習内容を振り返る (30分)	
	2	標準ディサースリア検査の概要				教科書・配布資料をもとに復習 (30分)	
	3	一般的情報の収集、発話の検査				教科書・配布資料をもとに復習 (30分)	
	4	2コマ:実技演習 発声発語器官検査:呼吸機能、発声機能、鼻咽腔閉鎖機能				教科書・配布資料をもとに復習 (30分)	
	5	2コマ:実技演習 発声発語器官検査:口腔構音機能				教科書・配布資料をもとに復習 (30分)	
	6	2コマ:運動障害性構音障害の評価、検査のまとめ方				実技練習 (120分)	
	7	2コマ:実技試験				実技試験の振り返り:到達点と反省点をまとめる (30分)	
	8	2コマ:実技演習 検査結果の解釈の仕方、症例を想定した検査演習				教科書・配布資料をもとに復習 (30分)	
	9	2コマ:症例検討 グループに分かれ担当症例の問題点の抽出				グループごとに内容を深めておく (60分)	
	10	2コマ:実技演習 運動障害性構音障害の訓練法(発声発語器官運動へのアプローチ)				教科書・配布資料をもとに復習 (30分)	
	11	2コマ:実技演習 運動障害性構音障害の訓練法(発声発語へのアプローチ)				教科書・配布資料をもとに復習 (30分)	
	12	運動障害性構音障害の訓練法(タイプごとのアプローチ)				教科書・配布資料をもとに復習 (30分)	
	13	運動障害性構音障害の訓練法(訓練の立案)				復習と訓練立案 (60分)	
	14	運動障害性構音障害の訓練法(訓練の実施)				教科書・配布資料をもとに復習 (30分)	
	15	国家試験問題を解く/まとめ				後期の復習と筆記試験の対策 (60分)	
評価方法	(1)授業の中で小テストを実施する。(2)レポートを数回実施する。(3)検査実技試験を実施する。 (4)定期試験(筆記)を実施する。以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。						
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	定期試験(筆記・実技)	○	○	○	○		70%
	小テスト	○	○				10%
	宿題・レポート	○	○		○		10%
	発表	○	○	○	○		10%
履修上の注意							

科目名	摂食嚥下障害の展開						
科目名(英)	Development of dysphagia						
単位数	2単位		時間数	45時間	担当者	八木 智大	
実施年度	2023年度		実施時期	後期	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務	
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼間部 2年						
授業概要	摂食嚥下障害の理解で学び得た基本的な概念を基に摂食嚥下の問題点を抽出できるようになります。治療計画を立案し訓練を提供できる知識や技術の獲得を目指します。診療技術だけではなく多職種との連携や社会資源などの知識を様々な症例を通して学び、模擬カンファレンスで評価結果や方針を報告することができるようになります。						
授業形態	講義：△		演習：○	実習：	実技：△	※ 主たる形態：○ その他：△	
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標	
	○	○				摂食嚥下の問題点を抽出することができる。	
	○	○				摂食嚥下に対するリハビリテーション計画を立案することができる。	
	○	○				摂食嚥下障害に対して治療的アプローチ以外の方法を検討することができる。	
	○		○			摂食嚥下障害に対する基本的な訓練技法をクラスメイトに実施することができる。	
		○		○		自らの考えを模擬的カンファレンスや個別レポートの中で表現することができる。	
テキスト・教材 参考図書	教科書：藤島一郎ほか「脳卒中の摂食嚥下障害 第3版 Web動画付き」医歯薬出版株式会社、2017 聖隷嚥下チーム「嚥下障害ポケットマニュアル 第3版」医歯薬出版株式会社、2018 MASA日本語版嚥下障害アセスメントDVD-ROM付 /医歯薬出版/ジゼル・マン、藤島一郎/2014						
授業計画	回数	授業項目・内容				授業外学修指示	
	1	訓練アプローチとは／姿勢の調整(ポジショニングの効果)				教科書の該当部分を復習する(30分)	
	2	食品調整(食形態で何が変わるのか)				教科書の該当部分を復習する(30分)	
	3	口腔ケア(歯科と嚥下との関わりは？)				教科書の該当部分を復習する(30分)	
	4	訓練法の解説～間接訓練と直接訓練～ 2コマ				教科書の該当部分を復習する(30分)	
	5	チームアプローチと薬物療法 2コマ				教科書の該当部分を復習する(30分)	
	6	外科的対応とカニューレについての理解 2コマ				教科書の該当部分を復習する(30分)	
	7	中間テスト				教科書の該当部分を復習する(30分)	
	8	訓練法～実習実技練習～ 2コマ				教科書の該当部分を復習する(30分)	
	9	実技試験直前！訓練方法の振り返り 2コマ				教科書の該当部分を復習する(30分)	
	10	実技試験 2コマ				実技試験の内容を復習する(30分)	
	11	模擬症例から倫理まで(忘れないで大切な事) 2コマ				教科書の該当部分を復習する(30分)	
	12	食品調整食べてみよう(この食感とは？とわからん)				教科書の該当部分を復習する(30分)	
	13	MASAについて(覚えていますか？)				教科書の該当部分を復習する(30分)	
	14	MASAを使用した評価(実際に評価してみよう)				教科書の該当部分を復習する(30分)	
	15	模擬カンファ、介護予防(役に成り切った人だけが楽しめる授業)				教科書の該当部分を復習する(30分)	
	16	国試を解く(最後は真面目に終わしましょう)				教科書の該当部分を復習する(30分)	
評価方法	(1)模擬症例についてのレポートを最終日までに提出。評価対象とする。(2)定期試験(筆記・実技)を実施。以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)B(70点以上)C(60点以上)D(59点以下とする)。						
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	定期試験(筆記)	◎	◎				30%
	中間テスト	◎	◎		○		30%
	実技試験		○	◎	○		30%
	レポート				◎		10%
履修上の注意							

科目名	吃音の理解と展開						
科目名(英)							
単位数	1		時間数	30時間	担当者	仲野 里香	
実施年度	2023年度		実施時期	後期	担当者実務経験	病院に言語聴覚士として勤務	
対象学科・学年	言語聴覚学科 2年						
授業概要	吃音の基礎知識や臨床に必要な基本的技能について学習する						
授業形態	講義：△		演習：○	実習：	実技：	※ 主たる形態：○ その他：△	
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標	
		○				吃音児者のおかれている状況について考えることができる	
	○					言語聴覚士としての援助の在り方を理解し説明することができる	
		○	○	○		吃音を理解し、情報収集(検査含む)、評価および指導・訓練など臨床に必要な基本的知識技能を身につけている	
テキスト・教材 参考図書	学苑社 シリーズ きこえとことばの発達と支援 医学書院 標準言語聴覚障害学 発声発語障害学 三輪書店 間接法による吃音訓練～自然で無意識的な発話へのアプローチ～						
授業計画	回数	授業項目・内容				授業外学修指示	
	1	吃音・流暢性障害の基本的知識				教科書・配布プリントを参考に復習をしておく	
	2	吃音症状 吃音中核症状とその他の非流暢性などについて				教科書・配布プリントを参考に復習をしておく	
	3	進展段階 吃音の進展段階について理解する				教科書・配布プリントを参考に復習をしておく	
	4	吃音児者のおかれている現状を知り、言語聴覚士としてどのように援助すべきか考える				教科書・配布プリントを参考に復習をしておく	
	5	吃音・流暢性障害臨床① 吃音・流暢性障害臨床の流れ 情報収集				教科書・配布プリントを参考に復習をしておく	
	6	吃音・流暢性障害臨床② 吃音検査法他				教科書・配布プリントを参考に復習をしておく	
	7	吃音・流暢性障害臨床③ 吃音検査法他				教科書・配布プリントを参考に復習をしておく	
	8	吃音・流暢性障害臨床④ 吃音・流暢性障害の指導・訓練法				教科書・配布プリントを参考に復習をしておく	
	9	吃音・流暢性障害臨床⑤ 吃音・流暢性障害の指導・訓練法				教科書・配布プリントを参考に復習をしておく	
	10	吃音・流暢性障害臨床⑥ 吃音・流暢性障害の指導・訓練法				教科書・配布プリントを参考に復習をしておく	
	11	吃音・流暢性障害臨床⑦ 吃音・流暢性障害の指導・訓練法				教科書・配布プリントを参考に復習をしておく	
	12	吃音・流暢性障害臨床⑧ 吃音・流暢性障害の指導・訓練法				教科書・配布プリントを参考に復習をしておく	
	13	吃音・流暢性障害臨床⑨ 吃音総合評価(症例検討)				教科書・配布プリントを参考に復習をしておく	
	14	吃音・流暢性障害臨床⑩ 吃音・指導・訓練法 再評価				教科書・配布プリントを参考に復習をしておく	
	15	まとめ				教科書・配布プリントを参考に復習をしておく	
評価方法	①定期試験を実施する②授業内で小テストを実施する③テーマに沿ったレポート作成をする						
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	定期試験	◎	○				80%
	小テスト	◎	◎				10%
	宿題・レポート	○	◎	○	◎		10%
	発表・作品						
履修上の注意							

科目名	成人聴覚障害の支援						
科目名(英)							
単位数	1		時間数	30		担当者	石橋 ルミ
実施年度	2023年度		実施時期	後期		担当者実務経験	補聴器メーカーに言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科2年						
授業概要	聴覚障害に対する言語聴覚療法の評価診断および言語治療に関する知識・技能・態度を修得する。						
授業形態	講義：△		演習：○	実習：	実技：	※ 主たる形態：○ その他：△	
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標	
	○					成人聴覚障害の支援方法について概説することができる	
	○					補聴器、人工内耳の適応例を挙げることができる	
	○					補聴器の調整について概説できる	
			○			補聴器を模擬的に調整できる	
		○	○			聴覚リハビリテーションの計画を立て模擬的に実施できる。	
テキスト・教材 参考図書	藤田郁代(監)標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第3版 医学書院						
授業計画	回数	授業項目・内容				授業外学修指示	
	1	聴覚リハビリテーション概論				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	2	聴覚障害の言語治療の基本理念				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	3	コミュニケーションモードの選択				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	4	聴覚補償機器の装用理論				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	5	聴覚補償機器の装用手順と調整				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	6	聴覚補償機器の効果測定				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	7	ボトムアップ聴能訓練				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	8	追唱法による聴能訓練				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	9	コミュニケーションスキルトレーニング				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	10	聴覚リハビリテーション				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	11	障害の全体像、環境条件				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	12	統合と分析、治療計画の作成				評価サマリを作成する(1時間)	
	13	実技演習				他のグループの演習から振り返りを作成する。	
	14	前庭機能のリハビリテーション				授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)	
	15	ケースカンファレンス				講座全体を振り返り、繰り返し学習する(1時間)	
評価方法	(1)レポートを数回実施する。(2)定期試験(筆記)を実施する。 以下を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。						
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	定期試験	○	○				70%
	小テスト						
	宿題・レポート			○			30%
	発表・作品						
履修上の注意							

科目名	視聴覚二重障害										
科目名(英)											
単位数	1		時間数		15時間		担当者		星子 隆裕		
実施年度	2023年度		実施時期		後期		担当者実務経験		病院にて言語聴覚士として勤務		
対象学科・学年	言語聴覚学科 2年										
授業概要	聴覚障害および関連障害に関する基本的概念と知識を修得する。										
授業形態	講義：△		演習：○		実習：		実技：		※ 主たる形態：○ その他：△		
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標					
	○					視聴覚二重障害のタイプを列挙しコミュニケーションモダリティを選択できる。					
	○					視聴覚二重障害を持った方の困難さの具体的事例を知る。					
				○		障害を持った方の情意を推し量ることができる。					
				○		フィールドワークを通して、自らの学びを広げることができる。					
		○				社会を通して、障害とその支援の在り方について考える					
テキスト・教材 参考図書	配布資料および各自作成するポスター										
授業計画	回数	授業項目・内容					授業外学修指示				
	1	学び方とゴール、盲ろうとともに					受講時のチームの振り返りを提出する 受講時の自分の振り返りを提出する				
	2	移動手段、社会に生きる					受講時のチームの振り返りを提出する 受講時の自分の振り返りを提出する				
	3	SDGsとピクトグラム					受講時のチームの振り返りを提出する 受講時の自分の振り返りを提出する				
	4	点字と指点字と触指文字					受講時のチームの振り返りを提出する 受講時の自分の振り返りを提出する				
	5	聴覚障害支援者の講話					受講時のチームの振り返りを提出する 受講時の自分の振り返りを提出する				
	6	フィールドワーク					発表資料を作成する				
	7	チーム別 発表会					他のチームの発表にフィードバックする				
	8	投票と表彰					定期試験対策を行う				
	9										
	10										
	11										
	12										
	13										
	14										
	15										
評価方法	(1)レポートを数回実施する。 (2)定期試験(筆記)を実施する。 以下を下記の観点・割合で評価する。成績評価基準は、A(80点以上)、B(70点以上)、C(60点以上)、D(59点以下)とする。										
		言語情報		知的技能		運動技能		態度・意欲		その他 評価割合	
	定期試験	○		○						30%	
	小テスト										
	宿題・レポート							○		30%	
	発表・作品									40%	
履修上の注意	聴覚系の他の講座資料を振り返りながら受講してもらいたい。 国家試験過去問題から関連問題を探し、開講期間に全問理解すること。										

科目名	臨床技術学Ⅱ									
科目名(英)	Clinical Technology Ⅱ									
単位数	1		時間数	30時間		担当者	高津原 直樹			
実施年度	2023年度		実施時期	後期		担当者実務経験	言語聴覚士として病院に勤務			
対象学科・学年	言語聴覚学科2年									
授業概要	1. 言語聴覚療法の目的における検査・評価・診断の流れを説明できる。 2. あらゆる要因を加味した、言語病理学的診断における根拠を統合して説明できる。 3. それぞれの病態や背景にあわせた、治療目標および計画を立案しその根拠について説明できる。 4. OSCEの実施により、具体的な臨床像を念頭においた取り組みの必要性を理解し説明することができる									
授業形式	講義：△		演習：○		実習：		実技：△		※ 主たる形態：○ その他：△	
学習目標 (到達目標)	言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標				
	○	○				検査・評価・診断の内容を根拠をもって選択し説明することができる。				
	○	○				言語聴覚障害に関わる疾患の病態について説明することができる。				
	○	○				治療目標や計画立案の内容を根拠をもって計画し説明することができる。				
	○	○	○	○		臨床実習後OSCEを通して自分の課題を知り説明することができる。				
テキスト・教材 参考図書	プリントを使用します									
授業計画	回数	授業項目・内容					授業外学修指示			
	1	模擬試験①					国家試験過去問を解き進め、理解して覚える。			
	2	評価実習前セミナー①(失語症分野)					評価実習に向けた準備を入念に行う。			
	3	評価実習前セミナー②(運動障害性構音障害分野)								
	4	評価実習前セミナー③(小児分野)								
	5	評価実習前セミナー④(摂食嚥下障害分野)								
	6	評価実習前セミナー⑤(評価実習全般)								
	7	評価実習後セミナー①(実習内容の全体共有)					評価実習を振り返り、3年次の臨床実習に向けた目標設定と具体的な行動目標を立案する。			
	8	評価実習後セミナー②(問題の洗い出しと課題設定)								
	9	評価実習後セミナー③(課題の遂行)								
	10	評価実習後セミナー④(課題の遂行確認)								
	11	評価実習後セミナー⑤(3年次に向けた行動目標)								
	12	実習後OSCE					フィードバックを受けた内容をよく理解し、今後の臨床技術向上に役立てる。			
	13	実習後OSCE								
	14	模擬試験②					国家試験過去問を解き進め、理解して覚える。			
15	模擬試験③									
評価方法	(1)授業の中で実習報告発表を実施する。(2)レポートを数回実施する。(3)定期試験(実技)を実施する。 以上を下記の観点・割合で評価する。 成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。									
		言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合			
	模擬試験	○	○				20%			
	宿題・レポート	○	○				30%			
	実習後OSCE	○	○		○		50%			
履修上の注意										

科目名	評価演習							
科目名(英)	Evaluation Exercise							
単位数	3		時間数	120時間		担当者	実習指導者	
実施年度	2023年度		実施時期	後期		担当者実務経験	病院および施設にて言語聴覚士として勤務	
対象学科・学年	言語聴覚学科 昼間部 2年							
授業概要	実習指導者の指導の下でリハビリテーションおよび言語聴覚療法の実際を見学すると共に、職業人、社会人としての態度を学ぶ。							
授業形式	講義：		演習：	実習：	○	実技：	※ 主たる形態：○ その他：△	
学習目標 (到達目標)	言語 情報	知的 技能	運動 技能	態度 意欲	その他	目標		
	○	○				言語聴覚士の業務の流れとその内容を理解し、実習指導者の指導のもと実施することができる。		
	○	○				言語聴覚士の一連の業務を通して、障害を持つ人への対応や職業人としての基本的態度を理解し、実習指導者の指導のもと、遂行することができる。		
	○	○				実習を通して自身の学習の到達点を確認し、3年次の臨床実習へつながる具体的行動目標を掲げることができる。		
テキスト・教材 参考図書	実習地による							
授業計画	回数	授業項目・内容				授業外学修指示		
	1	期間：2024年2月5日(月)～24日(土) ※施設の就業規定に応じて3週間実施(5日/週を基本とする) 開始前1週間は事前セミナー期間とし、心構え、メンタルヘルス、障害各論などの講義を行う。 実習後1週間は事後セミナー期間とし、実習で得た学びを整理し、発表を通して共有する。						
	2							
	3							
	4							
	5							
	6							
	7							
	8							
	9							
	10							
	11							
	12							
	13							
	14							
	15							
評価方法	評価演習指導者が学校の定める成績評価の基準によって評価した実習成績報告点を60%、 評価演習期間中における学校評価項目による評価点を40%として算出し、合算した値を成績とする。							
			言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
	上記参照		◎	◎	◎	◎	◎	100%
履修上の注意								